

「結局、人を救うのは？」
(ヨハネの福音書6章24節～40節)

牧師：原 雅幸

序)「奇跡のパン」その後

- ・5つのパンと2匹の魚で5000人以上の空腹を満たした奇跡は、イエスが神から遣わされた救い主であることを証する「しるし」だった。
 - ・人々は「奇跡のパンのお代わり」を望んだ。極度の貧困社会であったが「憐みがかえって自立を妨げる」ゆえ「お代わり」は与えられなかった。
- 身体が必要(食べ物・経済)は大切だが、これを追求する先に幸いはない。
結局は「お金」という考えは、惑わす力が強いが必ず裏切られる。



1)「働きなさい」から連想されること

- ・「働いて食べるの」は健康的なことである。では、「やりがいのある、価値ある仕事」に出会うとき、その人は救われるのか。
- ・「やりがいのある仕事」を捜してさまよう人々が大量にいる現代社会。人を生かすはずの仕事で、かえって生きる意欲がそがれてしまうこともある。
- ・世にある仕事のほとんどは良いものだが、「なくなってしまう食べ物のため」というイエスの評価は、良い仕事でも救いにならないことを示す。

2)「永遠のいのち」とは何か。

- ・17:3「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」→「知る」とは「交わり(関わり)」を通して相手と一つになること。神と調和した生き方のこと。
 - ・この生き方にシフトチェンジした人は、「終わりの日」に「新しいからだ」によみがえることが約束されている。
- 永遠のいのちをもって生きようになると、人生を一番楽しめるようになる。過度な期待がなくなるゆえに、適切な距離感を保てる。
- ・永遠のいのちをもつということは、人間としての全体性を回復すること。世界と人生の大局観(全体を視野に収めること)をもって今を生きる道。

3)「いのちのパン」とは何か。

- ・人の子(イエス)が与えるもの=神のこぼれ=聖書が「いのちのパン」。
- 聖書は「良い教え」だが、良い教えが人を救うのではない。人を真に救うのは神との信頼関係であり、聖書はそこに至る(育む)ための食べ物。
- ・イエスがわかり、信頼できることが実感できるようになる時に生まれるのが「信仰」である。この関係は永遠だから、無駄にならない。

結)「信頼」を育むために、求められていることは？

- ・小さな信頼をイエスは喜んで受け取り、幾倍にも増やしてくださる。

◆お話を聞きながら、答えを考えましょう。

①「みんなでピクニック」のお話を、正しい順番に数字をいれて並べましょう。



③ イエス様のなされた奇跡には、たくさんの意味がありました。関係ないものを選びましょう。

- () 神様は、身体のこと大切だと伝えたかった。
- () みんなの人気者になるために、ごちそうしたかった。
- () 神様は、人と一緒に働くことが好きだと教えたかった。
- () イエス様に従えば、働かなくてもご飯がもらえると宣伝したかった。
- () イエス様が神様から遣わされた本物の救い主だと教えたかった。

④ 聖書の言う「永遠のいのち」とは何ですか。自分で言い直してみよう。

◆お話を聞いた後で、考えましょう。

- * あなたは一週間の生活で何を熱心に求めていますか。それについてどう思いますか。変えたいところがありますか。